

高野山舍利会の儀礼をめぐって

小峯 和明

1 はじめに

二〇一五年五月一日、高野山金堂の舍利会が開創千二百年記念の一環として行われた。ここでは、舍利会の儀礼を中心に歴史の変遷とその意義をたどってみたい。

私的な立場としては、拙著『中世法会文芸論』（笠間書院、二〇〇九年）で提唱した〈法会文芸〉研究と、二〇一二年～一四年に支給された科研費活動による〈仏伝文学〉研究との双方の課題が関連する（小峯編『東アジアの〈仏伝文学〉』勉誠出版、近刊）。〈法会文芸〉に関しては、法会における唱導で読まれ、うたわれ、演じられるテキスト、図像や造型イメージ、言説、所作が直接の対象となるばかりでなく、法会に参集した人々の思いや願いをこめて綴られたもの、法会を媒介、経由してはぐくまれ、享受、再創造されたものをもあわせて対象となる。舍利会もその重要な儀礼に位置づけられる。

また、〈仏伝文学〉に関しては、釈迦の生涯を物語る「仏伝」（釈迦八相）を中心に、釈迦の前世の本生譚（ジャータカ）をはじめ、目連や阿難らの仏弟子譚、涅槃後の舍利をめぐると話譚、須弥山を舞台とする天竺神話等々をも含む広義の概念であり、舍利をめぐると言説や造型、イメージの総体も〈仏伝文学〉の一翼を担っている。ただ、舍利信仰はかなり多岐にわたるため、今回は最小限ふれるに止めざるをえないことをお断りしておきたい。

2 二〇一五年の金堂舍利会

まず、二〇一五年五月一日に行われた舍利会について報告しておきたい。当日、午後二時十五分に始まり、四時半頃に終了した。次第は以下の通りである。

入堂—惣礼伽陀—一次供花—一次伝供（四智梵語）—一次式師登壇—一次別礼伽陀、一輪花供、供茶—一次如来唄—一次散花—一次大行道—一次廻向—一次梵音—一次錫杖（「恭敬供養、三尊界会、哀愍撰受、護持仏子成大願」）—一次式師—一次讚歎伽陀（「願以此功德普及於一切、我等与衆生皆共成仏道、南無大恩教主、南無舍利神変、南無自他法界」）—諸衆退散

（一部、不明な点は当日出仕された神田英昭氏の示教による）

おおよそ、入堂、惣礼伽陀、供花、別礼伽陀、如来唄、散花、行道、廻向、梵音、錫杖、式読、讚歎伽陀、退散といった流れになる。次第には明示されないが、入堂し惣礼伽陀の後に、出仕僧はいったん階まで降りて供花を行う。出仕僧は七、八十人近いであろうか。緋の袴に白衣を着た高野花道会の方が花々を手で参集し、階の下でリレー式に花々を左右に分かれた出仕僧に手渡しする光景が目をついた。花は本尊前と、階の下脇に設置された机にも飾られた。これらは後述する院政期の始行以来一貫して執り行われているものである。また、散花は出仕僧達が紙製の蓮花の入った盆を手で、まず堂内を廻りながら散花した後に、階を降りて堂外に出て、金堂後方にまわり、左右に別れて、御影堂と根本大塔をそれぞれ廻りながら散花して歩く。この様はなかなか

壮観であった。舍利会において最も衆目を集める行とあってよい。

当日は、金堂の回廊で特別に聴聞を許されたが、堂内の奥まではよく見えず、舍利がどこに安置されているのかよく分からなかった。写真から判断するに、本尊左脇手前に置かれた金色の五輪塔形のものが舍利塔であると思われる。入堂の際に舍利を外から運んでくる奉迎形式ではなく、あらかじめ堂内に安置しておく形式であった。

本尊の正面に導師や式師らが座り、出仕僧は柱で仕切られた内陣と外陣にそれぞれ分かれ、本尊に対してコの字形に並ぶ。僧達がコの字形に本尊に近い側と離れた遠い側との二重に座す形である。本尊からみて礼盤（高座）の後方に導師らが座し、その後ろに衣冠姿の人々四人ほどが座して儀礼を取り仕切った。当日の様相を伝える「産経新聞ニュース」に「空海の父母の末裔、舍利会に参列」との見出しで報道され、空海の両親の末裔に当たる「四庄官」であることが後で分かった。

3 舍利会の始行

日本での舍利会の始行は九世紀にさかのぼり、十二世紀の院政期に盛行する。以下、小島裕子「舍利会における舍利の奉迎について」（歴博共同研究発表資料、二〇〇九年一二月）にもとづき、略年表で示そう。

- 貞観二年（八六〇） 4/4 円仁、比叡山惣持院で舍利会始行。（『三代実録』『三宝絵』『今昔物語集』）
- 貞元二年（九七七） 4/21 良源、吉田寺に舍利移す。（『日本紀略』『栄華物語』『今昔物語集』）
- 治安四年（一〇二四） 4/21 院源、祇陀林寺で舍利会。（『日本紀略』『栄華物語』『今昔物語集』）
- 康和五年（一一〇三） 5/26 忠嚴、東寺舍利会。（『東寺王代記』）
- 大治五年（一一三〇） 4/19 覚法法親王（1091-1153）、東寺で舍利、法文、道具など検す。（『御室相承記』）
- 康治二年（一一四三） 10/14 覚法法親王、仁和寺で舍利会。（『仁和寺御伝』『御室相承記』他）
- 久安二年（一一四六） 4/1 覚法法親王、高野山金堂で舍利会始行。（『高野春秋』『野山名霊集』『密宗年表』）
- 久安四年（一一四八） 2/25 覚法法親王、天王寺参詣、金銅五輪塔を造立、舍利奉納。（『仁和寺御伝』『御室相承記』）
- 保元三年（一一五八） 11/2 紫金台寺御室覚性法親王、仁和寺舍利会。
- 治承四年（一一八〇） 11/17 守覚法親王、仁和寺舍利会。

これによれば、舍利会は叡山の天台系で始まり、東寺や仁和寺、高野山など真言系に波及していった経緯が分かる。特に院政期の王権にかかわる舍利信仰の進展とひろがりにも関係するであろう。高野山での始行は久安二年（一一四六）、高野御室、覚法法親王によるものであった。

4 院政期の舍利会

院政期の高野山舍利会の始行を示す資料が、御室仁和寺の守覚法親王編纂になる法会儀礼の一大集成『紺表紙双紙』に「高野舍利会次第」として収載されている。すでに翻刻紹介されているが、根本資料となるので引用が長くなるけれども、全文を挙げておこう。（以下の引用はす

べて句読点、表記など私意、割注は（ ）で表わす）

高野舍利会次第

先当日早旦立標於東西僧座、左右行事所司立之。

次打集会鐘

次衆僧着集会所 食堂為其所、行事所司召計之。

次引列上堂

百八十僧左右相分、入自中門堂、金堂南階入正面戸、東西脇間着内陣座。

次導師呪願着礼盤

次諸僧惣礼一頌曰

敬礼天人大覺尊

恒沙福智皆円満

因円果満成正覺

住寿凝然無去來

南無歸命頂礼、大恩教主釈迦牟尼如來、金剛堅固遺身舍利、三反作礼。

次導師呪願登高座

次供花

中門内左右立机、各居供花。六十坏用時花。讚衆以下百二十人、左右相並降南階、到机下各取之、還登居仏前訖。更出外陣列立、誦供養頌。頌曰、

我以至誠身語意

稽首歸依仏舍利

讚歎無辺功德海

種々香花皆供養

於如來舍利 恭敬供養者

如是諸人等 皆以成仏道

南無恭敬供養、金剛堅固遺身舍利

頌畢三礼、還入内陣復本座。

次打磬 二度

次唱唄

唄師四人左右各二人、起座出外陣着正面座唱之。散花畢諸僧復座時、唄師入内陣又復座。

次堂童子賦花箱

次散花

音頭四人左右各二人、進出外陣列立正面、発音中段畢。

相並出自正面戸降南階、左右相分諸僧從其後、左右（方力）經金堂東、廻大塔亘南庭。右方經金堂西、廻金堂灌頂堂西北就左方後、左方廻金堂出立南庭、右方經灌頂堂西廻御影堂、至金堂坤角、見合左方相並、登南階左右同入内陣復本座。

次讚

讚衆四十人左右相並、出外陣列立仏前誦讚。

次梵音如讚
次錫杖同前
次堂童子収花箱
次打磬
次導師啓白
次読願文 此間呪願師読呪願
次神分
次勸請
次読式文 衆僧同音誦伽陀
次六種廻向等
次打磬
次導師呪願降高座就礼盤
礼仏畢着内陣座
次諸僧退下

（『守覚法親王之儀礼世界一仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究』勉誠出版、一九九五年）

仁和寺蔵『紺表紙小双紙』には、別に「高野灌頂次第」「高野花供次第」「高野御影供次第」「高野臨時御影供次第」など六帖一結が現存する。ちなみに始行の記録は、『高野春秋編年輯録』巻六・久安二年（一一四六）四月一日条に、

夏四月朔日、於金堂始行舎利会。以為恒格。是依法親王之勸勵也。（考、先年大御室寄賜七宝舎利塔、安置金堂。是以今繼其尊志矣。）導師琳賢檢校、呪願隆範阿闍梨、請僧百八十口。此前河内入道俊尊施入甲袈裟百二十帖。是奉為助保法親王之大発願也。

（考、前河内入道未勘也。案、頼義入道庶子任河内守、住州之壺井之城。今已寄附甲衣百二十帖、可非庸人必矣。壺井城主入道号俊尊乎。俟後識也。）（大日本仏教全書）

とみえる。導師は琳賢、呪願は隆範が勤め、百八十人が出仕した。大御室性信法親王が寄贈した舎利塔を金堂に安置し、覚法法親王の祈願によって実現したもので、河内入道俊尊が甲袈裟百二十帖を寄進したという。これにちなんで今回も陽暦の五月一日に行われたとみることができる。

現行と院政期の次第とを比べると、現行の舎利会がかなり略式であることが知られる。特に散花行道以後の導師の啓白（表白）から願文、神分、勸請等々の一連の次第が省略されている。これらは一般の法会でも定番の次第であり、現行では特に必要とされなかったであろう。

とりわけ注目されるのは、供花であり、中門内の左右に机を立て並べ、六十坏の季節の花を活ける。讚衆以下、百二十人が左右に相並び、南階に降り、机下で各花を受け取り、もとに還り、仏前に居し、さらに外陣に出て列立、供養頌を誦す。頌は、「我以至誠身語意、稽首帰依仏舎利、讚歎無辺功德海、種々香花皆供養」というもので、種々の香花が法会の場を彩る必須の道具立てだったことをうかがわせる。現行の舎利会でも供花がひときわ目を引いたように、始行の時点から一貫して行われていたものである。

ついで散花行道に関する注記で、行道のルートが記されていることも注目される。

相並出自正面戸降南階、左右相分諸僧従其後。

左右(方カ) 經金堂東、廻大塔亘南庭。右方經金堂西、廻金堂灌頂堂西北、就左方後。左方廻金堂出立南庭。右方經灌頂堂西、廻御影堂、至金堂坤角。見合左方相並、登南階、左右同入内陣、復本座。

これによれば、諸僧、南の階を出て左右に分かれ、左方は金堂の東から根本大塔を廻って南庭に至り、右方は金堂西から灌頂堂西北を経て左方の後ろにつく。さらに左方は金堂を廻って南庭に出、右方は灌頂堂の西を経て御影堂を廻って金堂の西南に至り、左方と並び、再び堂内に入る、というもの。

金堂が南面して一番南側に位置し、その西北に御影堂、東北に根本大塔が位置する伽藍配置で、灌頂堂は御影堂と大塔の間にあったが、幕末に焼失して以降、現存しない。

これを後述する近世の高野山大学図書館蔵『金堂舍利会法則』(安永二年版・一七七三年)と比べると、

次諸僧上臈前、随之、出正面左右東西相別也。

左方經金堂東、廻大塔西北、為輪出南庭、經金堂西、御影堂西灌頂院北東、金堂東、又出南庭、伺右方、同登階。右方經金堂西、廻灌頂院西北、付左方之淺臈後、至御影堂北、与左方相別、而為輪行御影堂与灌頂院之間、經金堂西、出南庭、伺左方、同登階。

となり、左方は金堂東を経て大塔西北を廻り、輪になって南庭へ出て金堂西を経、御影堂西、灌頂院北東、金堂東を経て南庭に出る。右方は金堂西を経て灌頂院西北を廻り、左方に付き、御影堂北から左右分かれて輪行し、御影堂と灌頂院の間から金堂西を経て南庭に出て堂内に戻る。

細部の差違はさておき、おおむね院政期と同様の行道であることが知られる。時代を越えて同じ行道がくり返されてきたわけで、今回の行道もほぼこれに準ずるものであった。

5 江戸期の舍利会

ついで、近世の舍利会次第をみておこう。いずれも高野山大学図書館所蔵の資料で、閲覧できたのは以下の三点である。

- ① 金堂舍利会法則 外題・舍利会法則。金剛三昧院本、安永二年版・刊本(一七七三)、濃茶無紋表紙・枳形粘葉装、93 コ金9、外題・舍利会法則、右袖・周伝。朱点あり。裏見返しに、「於南山初登山仰承之 イヨ宝洲房」の書き付け。
- ② 金堂舍利会法則 三宝院本、宝曆四年(一七五四)写本、素紙・横本列帖、486-1 三258、徳嚴院、伝決。見返しに朱書・「御社ヨリ金堂へ出仕者上臈先也」、墨書一つ書で「讚頭」「錫杖頭人」「梵音頭人」に関する書き入れあり。末尾に、堂内の出仕僧の配置を示す指図あり。
- ③ 金剛峯寺舍利会法則 金剛三昧院本、正徳六年(一七一六)写本、素紙・枳形仮綴、95 コ金10、薬王院住法。

これによれば、いずれも近世中期、十八世紀前半から後半のもので、①のみ刊本、②③は写本、書写年時は③が最も古い。相互に直接関係にはない。行道に関しては前に引用した通りで、ここでは便宜、最も情報も多く、流布したと思われる①の刊本を中心にみて、適宜、②③も扱うことにしたい。

①本書末尾には以下の注記がある。

此法会者久安二丙寅歳夏四月、高野御室覚法二品親王、七宝舍利塔安置仏舎利二粒而奉納于金堂。尔時、寺務琳賢大和尚奉詔見創行此会。自爾以来為恒規每歳行之。然其法則謬誤不少、及金剛三昧院快弁上綱進寺務也、命予是正。於是手本文明、正宝、永正、天正等旧記、而從事参考、遂登梓為青巖寺蔵版、云爾。

安永二年癸巳四月、金剛峯寺靈瑞南龍誌

高野山 經師八左衛門監司

これによれば、久安二年、高野御室が舍利二粒を納めた七宝の舍利塔を金堂に安置し、琳賢が舍利会を執行、以後毎年恒例で行われているが、法則に誤謬が多くなったため、金剛三昧院の快弁から命ぜられ、靈瑞が文明（一四六九～八七）、正宝（？）、永正（一五〇四～二一）、天正（一五七三～九二）年間の旧記を手本に検討して作成、青巖寺蔵版として刊行したという。靈瑞は四国讃岐の古利善通寺に移り、今日に及ぶ聖教の基本を作った学僧である。供花の条に、「旧云、出時、曼荼羅後直出。入時、正面内陣可入云々」とあり、中世の例が注記され、種々考証したであろうことが察せられ、古くは曼陀羅を架けていたことが知られる。なお②では、この注記は儀礼の作法として「供花」条の下に「入時者、正面ノ中間ヨリ可入云々」のごとく記されている。

一方、②では、「本云」として、以下の注記がみられる。

天文十三年甲辰四月晦日書之、秀尊玄舜房。

一役者ノ事、惣礼伽陀師已下ハ初メ奉ヲ取ル時キハ、皆替ル也。是ハ代付依有之也。唄ハ不替。

天文十三年初ハ伽陀、玄舜房ニ当ル。後、榮善房ニ当テ勤也。

これによれば、天文十三年（一五四四）四月の書写で、惣礼伽陀をめぐると一件も記されている。また、奥書に、

右以堯王院所持之本書写了。

宝曆四壬戌年四月上旬、伝決良海房

正徳六龍集丙申歳次卯月下浣、舍利会出仕御為補闕一助而已。

とあり、宝曆四年（一七五四）四月、良海房が堯王院本を書写したもので、正徳六年（一七一六）舍利会に出仕した時の次第を補闕したという。

本文冒頭には、「所司催足次第」がみられる。なお、この条は①にもみえるが、②の方が詳しく、③にはない。

先惣礼、伽陀師役也。二供花、讃衆已下、皆參。三供養頌、讃頭役。四唄士四人。五散花、頭四人。六讃、頭二人。七梵音、頭二人。八錫杖、頭二人先於巳刻鳴集會之鐘、

次諸衆百八十人集會食堂（但近來山王院）任左右張文九十人宛着座東西（今山王院故南北也）

次現參 左方西今北 年預今代 右方東今南 行事今代

次上堂列經食堂西中門東、食堂東中門西出仕、金堂任標着座。

先已具定鳴集會之鐘ヲ、次百八十人、食堂ニ集會任テ左右ノ張文ニ、九十人宛着座東西ニ。

次ニ現參右方年預代、右方行事代。次ニ上堂ノ列、食堂ノ西ハ經中門ノ東ヲ、食堂ノ東ハ

經中門ノ西ヲ出仕ス。金堂ニ任テ標着座ス。同導師、呪願着礼盤ニ。次勤行次第ハ可司催

足之。次諸僧惣礼伽陀師、座シテ標而出ス之。伽陀師者ハ座敷ヲ一切不立也。

儀礼の次第に応じた役割と人数及び着座の配置などが細かく記される。他本にみられないが、ほぼこれに応じた出仕であったろう。

院政期の例と後半の行道で次第を比べると、

次梵音如讚一次錫杖一次堂童子取花箱一次打磬一次導師啓白一次読願文、此間呪願師読呪願一次神分一次勧請一次読式文、衆僧同音誦伽陀一次六種廻向等一次打磬一次導師呪願降高座、就礼盤礼仏畢、着内陣座一次諸僧退下

となるのに対して、①では、

次梵音一次錫杖一次式師一次表白等一次讚歎伽陀一次讚一次諸衆退散

となり、式師と表白が逆になって、讚で終わる。「表白等」とあるのみで、願文、呪願、神分等々は、実際にやっても法則次第の筆録としては略された可能性もある。はたして、年代的には二十年前の②をみると、

次讚衆一次導師作法如式一次梵音一次錫杖一次磬一次表白一次読願文、神分析願一次勧請一次読式一次六種廻向一次導師呪願下高座、着礼盤礼仏了、着内陣而座一次諸僧退出

とあるから、院政期のそれと基本は変わっていないといえる。③の場合もほとんど②と同じで、最後が「次導師呪願下高座一次諸衆退出」と、より簡略になっている。①のように、次第の詳細が省略される場所に、徐々にそれらの次第そのものが行われなくなる傾向があり、今日の次第につながってくるのであろうか。

また、①から③のいずれも散花行道の行程を描いた図が示されている。②と③はほぼ一致し、左方は墨線で右方は朱線で行道の行程が記される。①は墨線のみで、刊本であるため、行程を現わす線は直線で示される。行程は三者ともほぼ合致する。

6 仁和寺舍利会との対比

ついで同じ覚法法親王によって高野山より三年先んじて始行された仁和寺舍利会の例をみておこう。これも仁和寺蔵『紺表紙小双紙』に四帖一結があり、すでに紹介されている。

「仁和寺舍利会次第」(①)によると、表紙見返に、「散花大行道 菩薩 童舞 舞人 楽人 散花師 引頭 衲衆 讚衆 梵音衆 錫杖衆」とあるように、法会の花形が舞楽を伴う散花にあったことが分かる。引用が長くなるので関連部分のみあげるが、八部衆が参集、乱声し、舞人楽人が楽屋前に出立、盤渉調を奏で、奉迎舍利となる。楽人が舞台に上り、北階から降りて東西に分れ、舞台の東北角に降り、舍利輿を舞台にあげ、堂中にすえる。八部衆が草蓆に座し、代衆僧が伽陀を誦し三礼。この間、楽人は誦音を合わせ、雅音を発し、楽人は楽屋に入り、衆僧は舞台を降りて着礼堂座。楽人が宗明楽を奏で、導師と式師の両師が高座に上がり、礼仏、諸僧惣礼。ついで楽人が秋風楽を奏でる。菩薩八人と童舞八人が各供花を捧げ、二行相分れ舞台を経て堂壇下に至り、役僧が仏前の机上に安置し、楽が止む。童舞は引き還り、左で菩薩供舞、右で曾利古を舞う。

かように舞楽法要が中心で華麗な装束と歌舞が衆目を集めたに相違ない。別の「舍利会次第」(④)では、奉迎舍利がより詳しく、

調子止後、舞人楽人左右相並、経舞台東庭(樹東)、渡東橋自経蔵巽角、到伝法院東庭発楽万秋楽新古

とあり、行列も「鉦鼓二人左右各一人」「所司二人各一人」、左右相分れて前行し、舎利輿は二人荷い、輿丁六人が担いだとされ、八部衆が相揃って舎利を守護奉ったという。この八部衆は、左方が「天、夜叉、阿修羅、緊那羅」、右方が「龍、乾闥婆、迦楼羅、摩睺羅伽」という布陣で、衆僧が舞台に立ち留まり、六列で左右各三列に別れたという。以下、大行道のルートも細かく記されているが、ここでは省略に従う。

また、「舎利会次第 無舞樂儀」(②)のように、舞樂を伴わない場合もあったようだが、高野山と異なり、舎利奉迎と舞樂法要が特徴的であることが知られる。

7 舎利会表白の表現

ところで、〈法会文芸〉研究の立場から問題になるのは、今まで取り上げた資料では、後半の導師が読み上げる表白や願文についての具体的な引用がみられないことである。そこで他の例を探っていくと、同じ仁和寺蔵『紺表紙小双紙』四帖一結の「美福門院御月忌次第」に表白例が見いだせる。美福門院は永暦元年（一一六〇）十一月二十三日に没、毎月二十三日の月命日ごとに舎利供養が行われていた。極樂往生を祈願する阿弥陀三昧とともに実施され、表白の全文が掲載されている。長いので隔句対の部分のみ着目して引用しておこう。初めの部分では、

浄飯王宮之中、星降神之迹。

菩提道樹之下、儼成仏之儀。

で釈迦の悟りをとらえ、「応化之期有限、泥洹之時将臻」と涅槃が近づいたことにふれ、

阿難費請、寧及一劫之留住。

摩耶知瑞、忽怪五夜之夢魂。

などのように、側近の弟子阿難が涅槃を遅らすよう説得しなかったことや天上界の母摩耶が怪異の夢を見る話題をつらね、そして、

玉毫藏而恵光無見、月沈黒鷲之峯。

金棺掩而実語不聞、風咽白鶴之林。

荼毘罷以遺骨云存、香姓分以流布。

惟広三国皆恃神変、四種悉成尊崇。

釈迦が説法した鷲峯山に月が沈み、釈迦の遺骸が金棺に覆われ、沙羅双樹に風が咽ぶように吹く。荼毘に付した遺骨を香姓婆羅門が仕切って分配し、三国にあまねく広まり、神変を頼みとし、ことごとく尊崇を集めた、云々という。「如来之舎利」は、「遮那仏之全体也」ともいう。そして門院の生前を讃え、施主の禪定仙院すなわち後白河院が聖霊の救済を祈願し、廻向する。

鎮遊如如之心殿、莫帰六趣四生之桑梓。

速躡円々之智船、宜超苦海愛河之波瀾。

ここには、釈迦の涅槃による舎利のいわれが格調高い駢儷文で綴られており、釈迦の伝記の仏伝をふまえて始めて表現でき、理解しうる内容となっている。これも私にいう広義の〈仏伝文学〉と認めることができるであろう。

同じ美福門院の舎利供養に関しては、称名寺蔵、金沢文庫保管・二十二巻本『表白集』巻二十に、有真僧都の作、「八条院奉為美福門院毎月舎利供養表白」(336、337)の二編がみられる。美福

門院の娘八条院が施主として供養するもので、前者の例で見れば、

夫、教主釈尊、牟尼善逝、
四八之妙相、永隱双樹之景、
八弁之円音、已沈提河之浪刻。
五十二類之集会、四衆八部之群機。

殊五百執金剛神、破威儀、抛金杵、悲泣唱曰、「如来大悲歸円寂、慈父釈尊趣泥恩。無明長夜、誰為灯炬、生死之大海、誰為船筏。無依無怙、無有覆護。毒箭深入、愁火熾盛」文。

実、傷猶可傷者、釈尊之涅槃哉。

(略)

理哉、尸棄大梵之為如来之護者、猶期解脫於遺身之利物。

実哉、無滅尊者之為在世之聖人、亦仰拱待於舍利之慈光。

況無仏之悪世哉、況滅後愚夫哉、専可恃可仰者、遺身化導哉。

以之思之、恭敬慈父釈尊之芳骨、祈悲母仙院之覺道。

(阿部泰郎他編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』勉誠出版、二〇〇〇年)

跋提河の辺り、沙羅双樹での涅槃にふれ、執金剛神らが金杵を投げ打って悲泣悲嘆する文言も引用される。この「文」とある引用部分は、名高い玄奘三蔵の『大唐西域記』巻六の以下に拠っていることが明らかである。

執金剛神密迹力士、見仏滅度悲慟唱言、「如来捨我入大涅槃。無歸無覆護。毒箭深入愁火熾盛」。捨金剛杵悶絕躄地。久而又起悲哀恋慕。互相謂曰、「生死大海、誰作舟楫。無明長夜、誰為燈炬」。金剛躄地側有卒堵波。是如来寂滅已七日供養之処。如来之將寂滅也。(大藏經)

金剛力士達が悲嘆のあまり倒れ込んだ傍に卒塔婆があり、そこを訪れた玄奘が涅槃の場を追体験し、それが法会の現場でも再現される。そして「無仏の悪世」において舎利の慈悲の光による救済を頼みとし、悲母の解脫をもとめる、というもので、やはり涅槃の場が対句を通して再構成される。

高野山における舎利会の表白類の全容を知ることはできないが、これらに類する〈仏伝文学〉の、特に釈迦の涅槃や荼毘をふまえた悲嘆と讃歎表現が充溢していたに相違ない。

また、表白や願文にあわせて、舎利講式も例が多く、名高い明恵の四座講式(涅槃講式、十六羅漢講式、如来遺蹟講式、舎利講式)や笠置の貞慶の舎利講式もあるが、もはや検討の余裕を失った。明恵の四座講式に関しては、高野山の金剛峯寺で毎年二月十五日、常楽会(涅槃会)が行われているが、ここでは明恵の四座講式が今も施行されている。今年二〇一六年二月に聴聞することができたが、十四日の深更から十五日の午前まで延々と行われる。テキストは漢文で書かれているが、ほとんど訓読されており、眼で見る漢文の対句表現と実際に訓読で耳にする対句とはかなり印象を異にする。明恵の講式が今も生きていることが体得できる。これらについてはいずれまた機会をあらためて検討したいと思う。

8 舎利会と道場観

舎利会そのものとは直接結びつかないかもしれないが、最後に舎利をめぐる修法として道場観について一瞥しておきたい。道場観は密教の修法で、梵字を起点にそれが様々な物や形に連想

され、次々とイメージが展開されていく観想法である。

たとえば、『覚禪鈔』巻一二八・舍利の条に梵字の種字を引いている、

三形 舍利、舍利變成宝珠、宝珠變成积迦

印 外縛、中指宝形

真言 如常

道場観 亮恵

観想、於米粒中有彼字。其色金色、遍在粒中無数色光。遙照泥梨等罪根衆生、拔苦与樂。往昔积迦成等正覺之時、為利末法濁惡衆生、隱諸相好、變身為此呪。依此方便、如来荼毘時、此呪遍在仏身、變身骨成米粒。撰諸相隨好功德。故依此呪力、流布末世救済衆生云々。

（大藏經圖像部）

舍利に相当する梵字を軸に、印相や陀羅尼によって、舍利を観想するわけだが、そこで鍵となるのが米粒であり、米粒から梵字が浮かび上がり、金色に光って米粒の中から無数の光を放つ。その光が衆生を救う。积迦が荼毘に付された時にこの呪文が身に遍在し、骨が米粒になったのだ、という。類似の例は、同じ『覚禪鈔』「舍利似米粒」の条に、「秘藏記云、天竺呼米粒為舍利。仏舍利亦似米粒。是故曰舍利」とあり、「舍利成宝珠」条には、「大論云、古仏舍利變成如意宝珠。如意宝珠變成米云々」とある。天竺ではそもそも舍利を米粒というらしい。舍利と米粒の相似性が言われる。今日、日本の寿司屋でご飯をシャリと呼ぶのもこれである。舍利と如意宝珠の結びつきは『御遺告』などで知られる通りだが、これがさらに米粒ともつながる。舍利会には説教や経釈はないようだが、これらは舍利会ともどこかでつながってくる面があるのではないかと夢想している。

以上、現行の舍利会と始行の院政期、近世の舍利会と比較し概観してみたが、今日に至ってなお、この仏事儀礼が脈々と受け継がれていることに感慨を禁じ得ない。従来、舍利信仰をめぐる研究は膨大な蓄積があるが、舍利会そのものに関しては必ずしも多くはなかった。今後も引き続き、舍利会における表白や講式などの〈法会文芸〉と儀礼、道場観他の修法などとの関連を探っていきたいと思う。

補注 「産経新聞」二〇一五年五月二日報道（インターネット）による。

開創一二〇〇年記念大法会が開かれている和歌山県高野町の高野山壇上伽藍で一日、积迦の遺骨を供養する「舍利会」が営まれ、弘法大師空海の父母の末裔と伝えられる四家の当主が参列し、進行役の大任を務めた。四家の当主はかつて、高野山麓の慈尊院（同県九度山町）で寺領の年貢米の取り扱いなどを担う庄官を務め、「四庄官」と呼ばれた。空海が弘仁七（八一六）年に高野山を開いた際、空海の父方・佐伯氏と、母方・阿刀氏の血縁者が、空海の母とともに讃岐（香川県）から移り住んだとの伝承が残っている。四家のうち二家は、高野山麓を離れて廃絶したとされていたが、昭和五九年の「弘法大師御入定一一五〇年御遠忌大法会」にあたって、金剛峯寺の調査で所在が判明。このときの大法会で初めて顔をそろえた。

※舍利会聴聞を始め、種々貴重な機会を与えて頂いた乾仁志氏、奥山直司氏及び閲覧の便宜を図って頂いた木下浩良氏に篤く御礼申し上げる。また、舍利会に関して種々教示頂いた小島裕子氏に御礼申し上げたい。